修士論文（要旨）
2020 年 1 月

大学生の愛着とソーシャルスキル，友人関係との関連

指導　鈴木　平 教授

心理学研究科
健康心理学専攻
218J4052
岸野　雄次

Master’s Thesis (abstract)
January 2020

Relationship between attachment, social skills and friendship in university students

Yuji Kishino
218J4052
Master’s Program in Health Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis supervisor: Taira Suzuki professor

目次

第 1 章　序論 ……1
　第 1 節　研究の背景 ……1
　　1.1.1　愛着とは ……1
　　1.1.2　愛着とソーシャルスキルに関する知見 ……2
　　1.1.3　友人関係とソーシャルスキルに関する知見 ……3
　　1.1.4　愛着と友人関係に関する知見 ……5
　　1.1.5　仮説モデルの構築 ……6
第 2 章　研究 ……7
　第 1 節　本研究の目的と意義 ……7
　第 2 節　方法 ……7
　　2.2.1　調査対象者 ……7
　　2.2.2　調査時期 ……8
　　2.2.3　調査内容 ……8
　　2.2.4　倫理的配慮 ……8
　　2.2.5　分析方法 ……9
　第 3 節　結果と考察 ……9
　　2.3.1　基礎統計量と *Pearson* の積率相関係数 ……9
　　2.3.2　下位尺度間の関連性 ……11
　　2.3.3　母親の愛着スタイルの分類 ……14
　　2.3.4　愛着スタイルの特徴 ……17
　　2.3.5　仮説モデルの検証 ……20
　　2.3.6　母親と父親の愛着スタイルの比較 ……25
第 3 章　総合考察 ……31
　第 1 節　まとめ ……31
　第 2 節　今後の課題と展望 ……32

引用文献
資料

序論

愛着とは「特定の対象と結ぶ，情緒的な心の絆」とされている（Bowlby，1969-1980；山口，2013）。この心の絆としての愛着を顕在化したものが愛着行動と考えられている。Bowlby（1969-1980）はこの愛着行動を「特定の対象に対して近接を求め，これを維持する行動」としている。例えば，子どもの愛着行動は「特定の対象がいつも自分を見守っている」，「いざという時には必ず助けてくれる」という安心感や信頼感があることで，探索行動を行えるとしている（繁多・青柳・田島・矢澤，1991）。この基本的な安心感や信頼感の感覚を幼少期に育んでいくことが重要とされている（岡田，2011；米澤，2018）。

この愛着理論はソーシャルスキルや友人関係との関連が報告されている（村上，2014；Michal, Dovrat, & Lital, 2017）。例えば，Oldmeadow, Quinn, & Kowert（2013）は両親へ見捨てられ不安を強く感じている人は，感受性や感情コントロールのスキルが高く，感情表出のスキルの低さが報告されている。一方で，両親へ居心地の悪さを強く感じている人は，社会的表現力のスキルおよび社会的コントロールや感情表出のスキルの低さが示されている。さらに，堀・小林（2010）は愛着理論を 3 つの愛着スタイルに分類し，ソーシャルスキルとの関連を検討した結果，3 つの愛着スタイルごとでソーシャルスキルの特徴が示されている。また，岡田（2005）は動機づけの一つである自己決定理論（Ryan & Deci, 2000）を用いて，友人関係への肯定的な動機づけがある人は適応的な友人関係を形成し，望ましい社会的行動が増えることを報告している。加えて，Laghi, Alessio, Pallini, & Baiocco（2009）は両親や友人の愛着が安定している人は有能感，自律性，関係性が形成されやすい傾向を報告している。しかしながら，今後の課題点として，大学生を対象に愛着や友人関係の動機づけの観点を踏まえた介入プログラム（ソーシャルスキル・トレーニング「以下，SST と略」など）を実施することが挙げられている（堀・小林，2010；粕谷・菅原・河村，2000；岡田，2008）。

これらのことから愛着や友人関係に対する動機づけの観点がソーシャルスキルの生起過程の個人差を規定する要因であることが考えられている。しかしながら，これらの基礎的知見の乏しさが考えられる。

本研究の目的と意義

本研究は大学生の愛着とソーシャルスキルおよび友人関係の動機づけの関連について探索的に検討することを目的とする。研究意義として，愛着スタイルや友人関係の動機づけの観点からソーシャルスキルの生起過程の個人差要因を解明することで，教育現場における対象者およびその周辺領域の対人関係を多面的に捉えることが可能になり，包括的支援（家族・友人・学校教員・公的機関の職員など）の一助になることが予想される。

方法

調査対象者は都内の私立 A 大学の大学生 935 名に配布し，記入漏れや未回答を除いた 465

名を有効回答数とした（回収率 49.73%，男性 179 人，女性 283 人，不明 3 人，平均年齢 19.65，*SD* ＝ 1.26）。調査時期は 2019 年 10 月から 11 月に実施した。調査内容は ①愛着尺度（古村・村上・戸田，2016），②ソーシャルスキル尺度（藤本・大坊，2007），③友人関係の動機づけ尺度（岡田，2005）であった。なお，本研究は桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号：19014）。

結果と考察

大学生の愛着とソーシャルスキルおよび友人関係の動機づけの関連について検討するために，*Pearson* の積率相関係数，各変数の因果関係を検討するために多変量回帰分析，母親の愛着スタイルを分類するために階層的クラスタ分析，分類された母親の愛着クラスタの妥当性を検討するために判別分析，母親の愛着スタイルの特徴を検討するために独立変数を愛着スタイルとした独立一要因分散分析，母親の愛着とソーシャルスキル間において友人関係の動機づけを媒介要因とした媒介分析，最後に母親と父親の愛着スタイルの比較をするために分割分析を実施した。

これらの分析および検討した結果，5 つに要約できる。1 つ目は母親との不安定な愛着はソーシャルスキルおよび友人関係の動機づけを抑制することが考えられる。しかし，友人関係に肯定的な意味づけや価値が高まることで不安定な愛着を補うことになり，表現力のスキルを高め，他者の気持ちや考えを受容するスキル，良好な関係を維持するスキルを高めることが示唆された。2 つ目は「安定型（母親へ安定した愛着を持つ人）」は，他の愛着スタイルよりもソーシャルスキル能力が高く，友人関係に対して肯定的な意味づけや価値を持っていることを示した。一方で，「拒絶型（母親へ居心地の悪さを感じている人）」は「恐れ型（母親へ見捨てられ不安や拒絶感を持っている人）」よりも友人関係を肯定的に感じているため，論理性を持って，自己主張することを示した。3 つ目は「外的（友人からの評価を常に気にしながら，友人関係を維持している動機）」の高低が，不安定な愛着スタイルの「恐れ型」や「とらわれ型」を弁別していることが示唆された。なお，「安定型」と「とらわれ型」のクラスタに対して，高い判別的中率が確認された。4 つ目は父親の愛着スタイルにおいて，母親の愛着スタイルの「とらわれ型」が分類されず，3 つのクラスタが抽出された。つまり，父親から見捨てられる不安を強く感じている学生は少ないことが示唆された。5 つ目は母親および父親に対して一定の割合で同じ愛着スタイルを形成していることが示唆された。つまり，父親に安定した愛着を持つ人は母親も安定した愛着を形成している，逆に母親に不安定な愛着を持つ人は父親も不安定な愛着を形成していることが示唆された。

今後の課題

本研究において 3 つの課題が挙げられる。1 つ目は，本研究デザインに，心理的変数（抑うつや自尊感情など）やソーシャルサポートなどを加えて，検討する必要がある。2 つ目は，本研究は父親の愛着とソーシャルスキルおよび友人関係の動機づけとの関連について言及をしていないため，父親に関する基礎的知見を積み重ねる必要がある。3 つ目は，介入プログラム（SST など）に愛着スタイルや友人関係の動機づけの視点を加えた研究デザインについて，検討することが期待される。

引用文献

Bowlby, J.（1969-1980）．Attachment & Loss（Vols. 1-3）．New York: Basic Books.

古村健太郎・村上達也・戸田弘二（2016）．アダルト・アタッチメント・スタイル尺度（ECR-RS）日本語版の妥当性評価　心理学研究，***87***，303-313.

藤本 学・大坊郁夫（2007）．コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, ***15***, 347-361.

繁多　進・青柳　肇・田島信元・矢澤圭介（1991）．社会性の発達心理学　福村出版

堀　匡・小林丈真（2010）．大学生の愛着スタイルとソーシャルスキルおよび心理・社会的適応との関連　学校メンタルヘルス，***13***，41-48.

粕谷・貴志・菅原正和・河村・茂雄（2000）．中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連について　岩手大学教育学部付属教育実践研究指導センター研究紀要，***10***，91-98.

Laghi, F., Alessio, M., Pallini, S., & Baiocco, R.（2009）．Attachment representations and time perspective in adolescence. *Social Indicators Research*, ***90***（2）, 181-194.

村上達也（2014）．大学生における愛着スタイルと友人関係への動機づけの関連　パーソナリティ研究, ***22***（3）, 289-292.

Michal, A., Y, Dovrat, F., & Lital, A.（2017）．Executive functions and attachment relationships in children with ADHD: links to externalizing/ internalizing problems, social skills, and negative mood regulation. *Journal of Attention Disorders*, 1-15.

岡田　涼（2005）．友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討：自己決定理論の枠組みから　パーソナリティ研究，***14***，101-112.

岡田　涼（2008）．親密な友人関係の形成・維持課程の動機づけモデルの構築　教育心理学研究，***56***，575-588.

岡田尊司（2011）．愛着障害――子ども時代を引きずる人々――　光文社

Oldmeadow, J. A., Quinn, S., & Kowert, R.（2013）．Attachment style, social skills, and Facebook use amongst adults. *Computers in Human Behavior*, ***29***（3）, 1142-1149.

Ryan, R. M., & Deci, E. L.（2000）．Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, ***55***, 68-78.

山口　創（2013）．幸せになる脳は抱っこで育つ　廣済堂出版

米澤好史（2018）．やさしくわかる！愛着障害――理解を深め，支援の基本を押さえる――本の森出版